

拝啓 めぐろシティカレッジ 受講者の皆様

コロナ禍の中、皆さまいかがお過ごしでしょうか。ウイルスの地球規模での蔓延は深刻化する地球環境において、「現代社会の有様」に何かしら警告を発しているような気がします。この辺でチョット立ち止まり、これから先の地球と世界について考えてみることも必要な事と思います。

今回、お送りしますエッセイでは 2014 年 5 月 17 日から 30 日にかけて調査に入ったカメルーン・バカ民族の社会について綴ります。アフリカ中央部、熱帯雨林が繁茂する自然環境の中、自然との共存生活を送るバカ民族の社会を通して現代社会について考えてみたいと思います。

敬具

令和 2 年 8 月

めぐろシティカレッジ カリキュラム委員

生井 貞行

めぐろシティカレッジ エッセイ No. 2 (令和 2 年 8 月発行)

現代社会についての一考察

— カメルーン・バカ民族社会から学ぶ —

生井 貞行 元桜美林大学講師

はじめに

ここは熱帯雨林の中。繁茂する大樹や草木そしてそれらに絡まる蔓草により先が見えず、視界が制限される世界。そして耳を澄ませば小鳥のさえずりや動物の草木を踏む足音が聞こえ、呼吸する度に梢の香りがする世界。

ここは熱帯雨林の中。見ることのできないものを見るために、そして聞くことのできない音を聞くために五感はもちろんのこと、想像力が要求される世界である。

本稿はカメルーン南東部の熱帯雨林に居留し、移動しながら狩猟・採集の生活を送っているバカ民族の社会についての現場からの報告である。

バカ民族とは

バカ民族はピグミー民族とも言われている。しかしながら今日、アフリカ中央部の熱帯雨林で移動しながら狩猟・採集生活を送るアカ、ムブティ、エフェ、バボンゴ、トゥワなどの異なった言語集団を身体的特徴により一括りにピグミー民族に分類することに対して異論がなされている。本稿では「バカ民族」という固有の集団名を記す。

バカ民族は狩猟・採集を生業にして移動を繰り返しながら生活している。その社会は単一または数系統の父系出自集団(イエ)を核に形成され、その基本原理は徹

底的な「平等主義」である。実質的な首長は存在せず、誰一人として特権を持ち、権力を行使する者はいない。一人一人は対等な関係で繋がっている。平等社会を生み出す根幹のひとつに徹底した食料分配があげられる。また日常の食料はもとより、私的な利益や財産を獲得し蓄積することを回避し、身分差別を生む社会的地位を認めず、狩猟などに長けた人物は栄養などの特権を求めず、周囲も特別扱いはいらないなど平等社会を維持するために必要な規範が生活の中に組み込まれている。

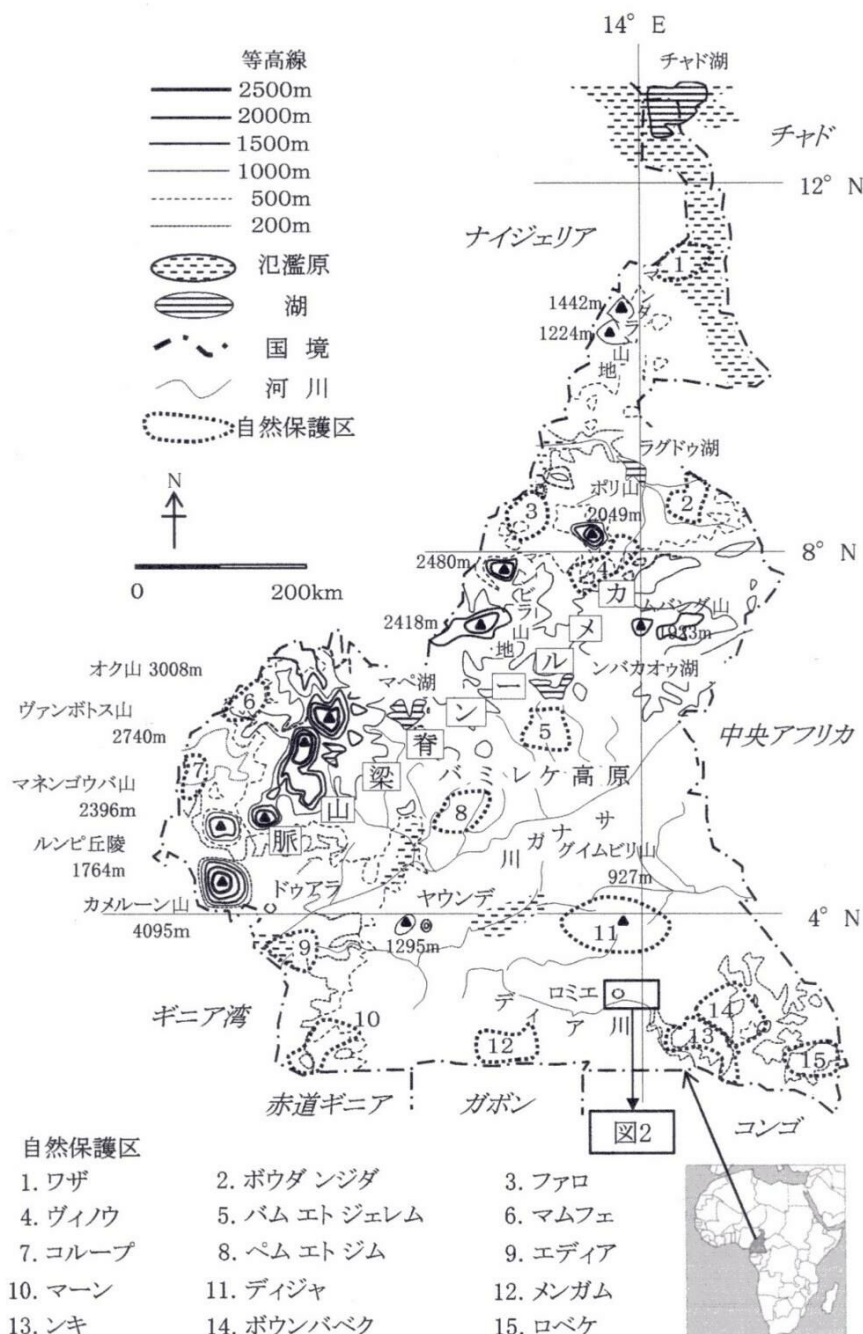
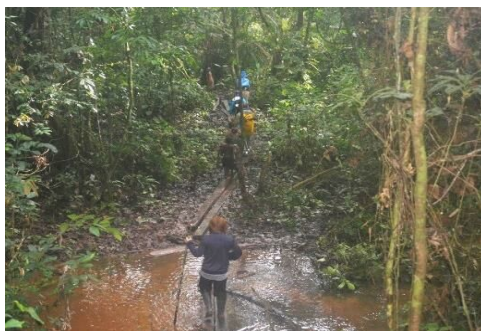


図1 カメルーン地勢図

Atlas du Cameroun, Paris France Edition J.A, c2006より作成

バカ民族のキャンプ地へ

朝、五時半起床。熱帯雨林の中に設置されたテントはけぶる朝靄に包まれていた。熱帯雨林の高い湿度では日本で経験する朝のすがすがしさを感じることはできなかった。朝食をすませ、荷物をまとめ、バカ民族のキャンプ地を目指して歩き始めた。太陽の光を遮る高く伸びた樹木やそれらに絡みつく蔓性植物、露に濡れた下草、視界を遮る熱帯雨林の中を山刀で草藪を切り除き、道を拓きながら進んだ。泥濘に足はとられ、膝まで水に浸かったり、濁流を渡渉したりなど冒険ドラマのような道筋であった。歩き始めて2時間程経った。微かな音が聞こえてきた。最初、梢の葉が風にふるえて発している音かなと思った。気にも留めずに歩き続けた。そのうち微かに聞こえていた音がはっきりとした歌声となって私の耳に入ってきた。ポリフォニーである。バカ民族の女性たちによる多声合唱は密生した熱帯雨林の樹木の隙間を縫って森に棲む精霊に語りかけている。私たちの訪問をポリフォニーで歓迎してくれているのだ。心、踊った。



熱帯雨林の中をキャンプ地へ向かう



歓迎するバカ民族の人たち

キャンプ地のようす

バカ民族は居留するキャンプ地として樹木の伐採跡地や以前利用したキャンプ地跡を選ぶ。またキャンプ地選定の条件として近くに川が流れていることや獣が多く棲息していることなどがあげられる。キャンプ地は樹木の伐採跡地につくられていた。中央には直径 3m 程の大株がいすわっていた。キャンプ地は大まかに南北 40m、東西 50m の長方形をした広さであり、森林(ベレ)に囲まれた空間(ビ)につくられていた。大木の株を中心に据えた広場(ティンド)には生活用品などを作る作業場や物干し場、廃材置き場などがつくられている。住居(モングル)は広場の周囲に建てられている。住居は細い立木を何本も切って地面に突き刺し、半円球の骨組みを作り、ンゴンゴクズウコンの大きな葉で被ったものである。 キャンプでは二系統の父系出自集団が共同生活(モロンゴ)を送っている。大人約 120 名、子ども約 40 名の大世帯である。

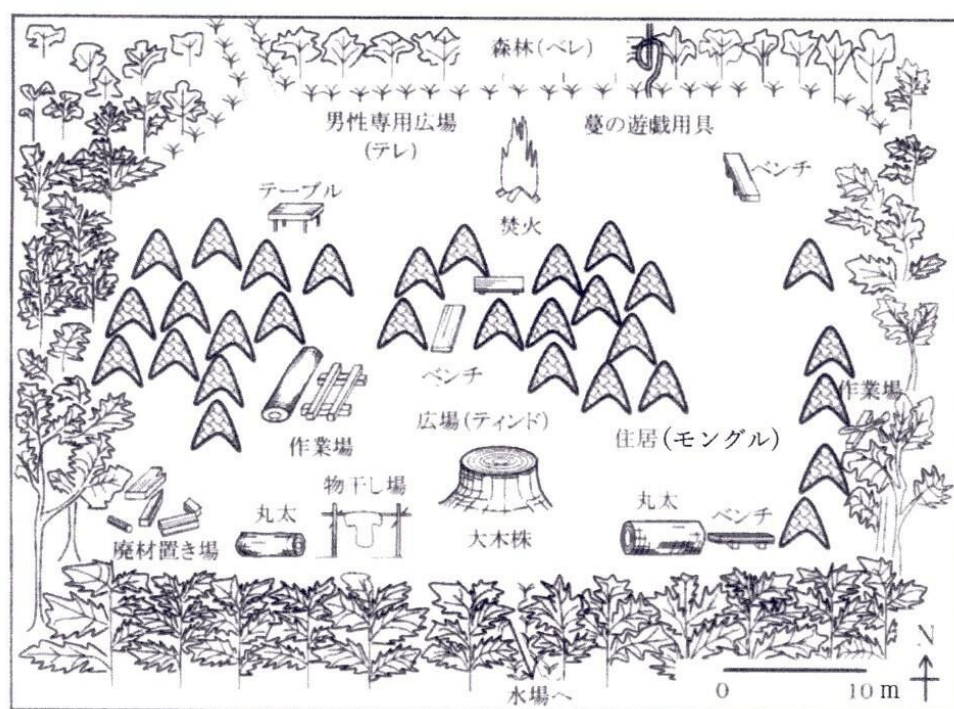


図3 バカ民族のキャンプ模式図

現地調査により作成(2014年5月25日)



朝陽が射すキャンプ地



ンゴンゴクズウコンの葉

キャンプ地におけるバカ民族の生活

居留地における一年間の気候は乾季と雨季に分かれる。男性と女性の労働役割には分業が見られ、乾季の午前中には男性はハチミツ採集、女性は家事、午後には男性は跳ね罠猟に出かけ、女性は搔い出し漁労をする。雨季には男性は午前、午後ともに跳ね罠猟、女性は家事や育児などである。また焼畑農耕も行っている。狩猟・漁労具、燃料、食器、住居の資材など生活必需品のほとんどは森から得ている。また近隣に居住する農耕民の手伝いをするにより賃金や食料など必要な物を手にいれたりもしている。樹木は様々な病原体から樹木自身を守るために抵抗物質を樹皮に内包している。バカ民族はそれらについて熟知しており、独自の優れた伝統医療の知識を受け継いでいる。マラリア薬、強壮剤、咳止め、腎臓薬、胃腸薬など森を散策しながら説明をしてくれた。キャンプ地は数か月毎に移動する。



狩猟にでかけるバカ民族の男性たち



搔い出し漁労

開発に追われるバカ民族

近年、熱帯材を伐採・搬出するための開発道路がキャンプ地のそばまで建設されている。それにより獲物の数が減少したり、居留地が狭められたりするなど狩猟・採集生活に支障が生じている。また外部世界との接触を通して健康的に抵抗力の弱い人たちが病気に罹患したり、診療体制も不十分である。キャンプに滞在中、ユネスコ・スタッフが幼児に予防接種をするために来訪した。ユネスコ・スタッフの地道な活動に感動を覚えた。先住民族を訪れる際にはウイルスに感染させないよう注意深い配慮が必要である。多くの先住民族にとって今日は至難の時代である。先住民族のアイデンティティが守られることを祈りたい。



熱帯材の搬出(ロミエにて)



ユネスコによる予防接種

森の精霊との集い

バカ民族が崇拝する森の精霊を「モンジェケンジェケ」という。モンジェケンジェケは超自然的な力を持つバカ民族の守護神である。バカ民族は狩りが成功した時、その日の夕暮れに全員が集い、歌い、踊り、森の精霊に感謝を捧げる。この集いを「ベ」という。われわれがキャンプ地を離れる前夜に集いを開いてくれた。男性たちは「ルマ」と呼ばれる太鼓をリズムカルに打ち鳴らし、それに合わせて女性たちが即興に歌い、踊った。迫力満点のパフォーマンスである。集いが進むにつれて女性たちは興奮の極に達し、トランス状態に陥った。そのタイミングを狙って森から登場するのがモンジェケンジェケである。男性が打ち鳴らすルマと女性たちのポリフォニーと踊り、そして精霊とが織りなすドラマが熱帯雨林を舞台に夜更けまで演じられた。高度なバカ民族文化に浸かることができて感動した。



トランス状態に陥る女性たち



精霊(モンジェケンジェケ)

おわりに

資本主義社会の基本原理は競争を核に市場を通した利潤追求である。平等主義社会の基本原理は平等を核にした共存である。それぞれの社会はそもそも根底から基本原理が異なっている。

コロナ禍により被る被害には階層性が見られ、特にパート、非正規雇用労働者、ネットカフェ難民、路上生活者、外国人労働者などの社会的弱者に過大な生活困窮をもたらしている。またコロナ禍は地球環境の変動が深刻化する今日において一過性のものでは決してなく、今後とも豪雨、大型台風、旱魃、森林破壊、海水面の上昇など姿を変えて様々な「禍」が地球を襲うであろう。人類は利潤追求の為、無限に行き過ぎた開発を進めてきている。今、その「しっぺ返し」を自然から受けている史的状況と言っても過言ではない。

バカ民族社会の平等性は決して生まれながらにして与えられたものではなく、彼らの意志と努力によってつくられ、維持されているものである。バカ民族は自然の許容範囲内において、自然を含めてお互いが共に生きるために絶え間ない努力を日々積み重ねている。彼らから学ぶことは多い。

付記

コロナ禍の中、お身体ご自愛ください。めぐろシティカレッジで共にまた勉強できる日を楽しみにしております。